

アメリカ南部人移民の植民地経験②

おやさと研究所講師
中西 光一 Mitsukazu Nakanishi

フランク・マクマランの植民地：旅のつづき

ニューヨークからリオデジャネイロへの船旅は1カ月かかり、その間、嵐に見舞われることなく、南部人たちは無事にブラジルへたどり着くことができた。彼らはリオデジャネイロのホテルに数日間滞在したのち、最後の船旅に乗り出し、1867年6月にヴァーレ・ド・リベイラ地方のジュキアに到着した。こうして、マクマランに率いられた南部人のブラジル移住は前回記したように紆余曲折を経て実現したが、その後、さらなる不幸が彼らを襲うことになるのである。

植民地活動が始動した直後の9月29日、マクマランは持病により命を落としてしまう。その結果、後継者争いが勃発し、植民地内では同胞間の対立や折衝が相次ぎ、しばしば同床異夢の状況が生じた。この争いは、1865年にマクマランとともにブラジルを調査したウィリアム・ボウエンと、マクマランのおじであるジェームズ・ダイアーの間で繰り広げられ、数カ月間にわたって続いた。しかし、ほとんどの南部人がボウエンの側についたため、最終的に彼が植民地の実権を握ることとなった。こうして南部人たちは気持ちを整理し、植民地活動を再開させた。一方、ダイアーとその家族は、スティーブ・ワッソンという人物と行動を共にし、やむなく別の地域へ移住した。

ところが、その後の植民地は長くは続かなかった。その理由として、次の点が挙げられる。1つは、前回のブラード・ダンの事例と同様に、農業の失敗が原因であった。すなわち、ジュキアの土地は生産性が低く、農業に適していなかったのである。もう1つは、南部人はホスト社会に溶け込めず、ブラジル人に対して非妥協的で、時には抑圧的な姿勢を示していた。彼らの多くは白人至上主義者であり、異人種間の混淆が進んだブラジル社会に嫌悪感を抱き、現地社会に適応することができなかった。

この点について“人種”に注目し、南部人の人種観を考察したルシアナ・ブリトによれば、彼らは白人と黒人の混血が進んだブラジル社会において、多数の「ムラート（mulato）」（白人と黒人の混血）が社会的・政治的地位を享受していたことに衝撃を受けたと指摘している。つまり、ブラジル人は黒人に対して寛容であり、異人種間混淆への抵抗感を持っていなかった。そのようなブラジルの社会文化的性格は、白人至上主義を信奉する南部人にとって強烈なカルチャーショックとなり、混血に対する恐怖心を一層強めるとともに、彼らの植民地活動への意欲を失わせる結果となったのである。この人種に関する問題については、改めて別の回で詳しく論じることとする。

ジェームズ・ガストンのシリリッカ植民地

シリリッカ植民地（以下、シリリッカと略す）は、サウス・カロライナ州出身の医師ジェームズ・ガストンによって、1867年6月にジュキアから南西へ約50キロメートルの場所に築かれた。植民者の数はわずか7人であり、ダン（150人）とマクマラン（140人）の植民地と比較すると、きわめて少人数であった。しかし、シリリッカの南部人たちは現地の市場経

済のなかで巧みに活動し、ブラジル人との人的ネットワークを構築しながら、ホスト社会に溶け込んでいった。

シリリッカには2つの土地が存在していた。1つは、借地としてフルウッドという人物に付与されたものであり、もう1つは、別の南部人であるビュフォードの管理下にあった。これらの土地は、いずれもポルト（シリリッカ港）の周辺に位置していたと考えられており、南部人たちはその地でトウモロコシ、エンドウマメ、生姜、乾物、ベーコン、マテの茶葉、タバコなどの換金作物を生産し、イグアペの市場へ出荷して収益を得ていた。シリリッカにとって、イグアペは経済活動の中心地であり、当時のブラジル人商人の多くも、“市内唯一の交通路”であったリベイラ・デ・イグアペ川を利用して、各地で生産された農畜産物のほとんどをイグアペへと出荷していた。

シリリッカの商談に直接コミットしていたのは、リーダーであるガストンであった。彼は、当地の食品価格の変動や物流管理にも精通していたため、近隣の町ファシーナで医療に従事する傍ら、商談も行っていた。そして、それに関する情報や具体的な用件を手紙に記し、シリリッカの南部人たちに送っていた。また、彼らは奴隷の売買にも関与していた。実際、マクマランおよびダンの植民地に関する文献には奴隷に関する記述は見られないが、シリリッカにおいては、デュランという人物が黒人奴隷を所有していたことが確認されており、ガストンやビュフォードも奴隷売買の取引に関与していた。

このように、シリリッカの南部人たちが奴隷の売買に従事していたという事実は、彼らが新天地ブラジルにおいても、アメリカ南部の戦前的な価値観—すなわち白人至上主義—に染まっていたことを示している。奴隷の売買は、まさにそのような彼らの心情を端的に表していたと言える。

こうして、これまでのシリリッカの様子を概観すると、一見、ホスト社会において成功を収めたかのように見える。しかし、やがてシリリッカは衰退の一途をたどることとなる。その具体的な理由については、菅見の限りでは、商業活動における何らかの戦略的失敗に伴い、南部人たちがガストンに反旗を翻したことによって、植民地内部に亀裂が生じたことが主因であったと考えられる。植民地の解体後、フルウッドやビュフォードらは、サンパウロ州サンタバーバラ・ド・オエステ市にあるノリス植民地へ移住したとされ、デュランはサン・シマンという町に移った。一方、ガストンはヴァーレ・ド・リベイラ地方への愛着からファシーナに留まり、医師としての職を続けたが、十分な利益を得ることはできなかった。最終的に彼はその地に見切りをつけ、家族とともにカンピーナスという別の町へ移ったのである。

[参考文献]

Luciana da Cruz Brito. *Impressões norte-americanas sobre escravidão, abolição e relações raciais no Brasil escravista*. Tese (Doutorado em História Social) – Faculdade de Filosofia, Letras e Ciências Humanas, Universidade de São Paulo, São Paulo, 2014.
William Clark Griggs. *The Elusive Eden: Frank McMullan's Confederate Colony in Brazil*. Austin: University of Texas Press, 1987.